

The Dead Don't Care
1938
by Jonathan Latimer

目次

サンダルウッドは死の香り

5

訳者あとがき 333

解説 笹川吉晴 336

主要登場人物

- ビル・クレイン……………ニューヨークの私立探偵
- トマス・オマリ……………クレインの同僚
- ドク・ウィリアムズ……………クレインの同僚
- ペン・エセックス……………富豪の息子
- カメラリア・エセックス……………ベン・エセックスの妹
- トルトーニ……………ギャンブラー
- イーストコム少佐……………エセックス家の財産を管理する信託会社の代理人
- ポール・デイ・グレガリオ……………以前、カメラリアと駆け落ち騒ぎを起こした伯爵
- イマゴ・パラグアイ……………謎めいたダンサー
- ザ・アイ……………エセックスへの脅迫状の送り主

第一章

夕焼けが、白い大理石造りの屋敷の窓に金色のペンキをまき散らし、咲きほこるアザレアの花を杏子色や石竹色やサーモンピンクに染めていた。ビュイックのコンバーティブルが砂利の音を立てながら、ダイオウヤシのざらざらした樹幹のそばで左に折れ、ついで噴水のところを右に曲がると、琥珀色のガラスと鉄で設しつらえてある入り口のひさしの下で停止した。

浅黒い長い顔をしたトマス・オマリーは、啞然とした表情で、その堂々とした正面玄関に灰色の目を走らせると、思わず感嘆の口笛を鳴らした。

「悪くないな」

彼の相棒がコンバーティブルのエンジンを切った。相棒の名はウイリアム・クレイン。困惑した表情で、巨大な黒檀の扉についている真鍮のノッカーを眺めている。「あれをたたくつもりか？」と、とがめるような口調で言った。彼の左目のまわりには治りかけの黒あざがあるが、むこうみずというよりはむしろ滑稽な印象を与えている。

「当然だろ」オマリーが答えた。「俺たちや招待されてるんだぞ」

「それもそうか」クレインはそう言うのと、革張りのシートから砂利の上にするりと降りた。三日月形の階段を三段上がり、ドアのノッカーを持ち上げようとしたそのとき、私道で物音がして、クレイン

は思わず振り向いた。

二羽のピンクのフラミンゴが、噴水のほうからコンバーティブルに向かつてそろそろと近づいている。その歩く様はまるで威厳のあるリウマチ患者といったところだ。竹馬のような脚を慎重に動かし、不審げに小首をかしげている。両目はびかびかに光っているベストのボタンのようだった。

「何なんだ、あれは！」とクレインがわめいた。

「よかった。きみにも見えるんだな」オマリイがコンバーティブルの車内から応じた。「幻覚を見たのかと思つたぜ、一瞬。それにしても、ありゃあ一体何だ？」

フラミンゴはオマリイから十フィートの位置で止まった。その高貴なくちばしや、礼儀正しくものを問うような顔つきや、まばたきひとつしなばつちりした目のせいか、彼らはさながら二人の年老いた学者のようで、このオマリイとは何者かと考えあぐねているように見えた。

「まあ鳥の一種だろ」とクレインはあいまいな調子で答えながら、ノッカーに向き直った。

オマリイはフラミンゴを気にしながらも、ビュイックのハンドルの下に滑り込み、クレインのあとに続いて外に出た。クレインが黒檀のドアに近づいていくと、そのドアが開き、黒髪、情の薄そうな唇をしたとつつきにくそうな男が現れた。長年に渡って自分の感情を表に出さずにきた習慣が、男の顔をまるで仮面のような表情にしていた。男はこの家の執事だった。

「オマリイ様でいらつしやいますか？」男が訊いた。「で、こちらはクレイン様で？」

男はエナメル革の靴に、黒っぽいズボンを着き、暗紫紅色のサッシュベルトを締めて、メスジャケツト風に仕立てた、丈夫な白の綿のコートををはおっている。

「僕がクレインで、こつちがオマリイ君だ」

「それは大変失礼いたしました」男はそう言つて黒檀のドアを開け放し、三日月形をした一段目の階段に歩み出た。「エセックス様がお待ちです。お荷物をお運びしましょうか?」

クレインは男にコンバーティブルの鍵を渡した。「荷物は折りたたみ式の後部座席の中だ」

彼が執事のあとから階段を降り始めると、オマリーが肘で脇腹を突いてきた。「ドアの上の窓を見てください」

クレインはさりげなく家屋敷のあちこちへ視線をさまよわせた。背を弓なりにそらした噴水像、広々とした緑の芝生、夕闇の中で沈んだ色調になったアザレア、ヤシ、屋敷の白壁、そしてドアの上の窓……。

ついで彼の視線はコンバーティブルへ、ランブルシートを引つ張っている執事へと移つていったが、頭の中には、今見たばかりの窓辺の残像がしっかりと刻みこまれていた。ひとりの男が奥のほうに坐つていた。帽子を目深にかぶっているせいで、顔は影になっている。男は刺すような視線でこちらを見下ろしていた。何やら不気味な男だった。

執事がランブルシートを開いた。そして片足をクロームのバンパーにかけて、大型の豚革のスーツケースをとろうと腕を伸ばした。その際に彼の綿の上着が背中までずり上がり、サッシュベルトの下にしまいこんである、おそらくは二十五口径のコルトであろう小型の青い拳銃が見えた。

一瞬、クレインとオマリイの目が合った。

執事がクレインの寢室のドアノブに片手をかけて言った。「エセックス様を探してまいります」

男の目は黒く小さく、まばたきひとつしない。その目が部屋の中を見据えていたが、やがてドアが

まるで自らの意志があるかのように勢いよく閉まった。

オマリリーが安楽椅子の袖に腰を下ろして言った。「なかなかの男前だったな」

「まるで山猫だよ」クレインは、部屋の脇にある、ドアに面したフランス窓を乱暴に開け放つて、スペイン風のバルコニーに出た。「おおっ！海が見えるぞー！」

眼下にはたいそう広々とした中庭パティオがあり、小ぶりのヤシが茂り、群生する熱帯の花々が咲き乱れ、派手な色のパラソルやら金属製のテーブルやら鮮やかなオレンジ色のペンキが塗られた椅子やらが置いてあった。中庭パティオの突き当たりには白いプールがあり、その向こうには灰色グレイがかつた濃黄色イエローの素晴らしい砂浜が広がっていた。海岸にゆつくりと寄せては返す大西洋からの大波が、夕闇の中に銀色の線を描いている。

オマリリーはフランス窓のところへ行くと、その光景を冷静に見据えて言った。「この舞台装置は一体何なんだ？」彼が言葉を発すると、口元で揺れている煙草の火が怒ったように真っ赤になった。

クレインは肩をすくめた。彼は完璧なまでの風景に、新緑に覆われた中庭パティオの静謐せいひつさに、ものうげな波の音に、顔に当たる柔らかく暖かい風に、すっかり魅了めいりょうされていた。風は花の香りを大量に含み、ほとんど味わうことすらできそうだった。

「まあ、別にかまわんがな」とオマリリーが言った。「食い物がうまい限りは」

クレインは煙草に火を点けて、満足げにその煙で肺を充満させた。おそらく食べ物だって申し分ないだろう。酒も。そしてベッドも。チャールストンからの遠距離ドライブで、体の芯まで疲れ切っている彼は、部屋にあるダブルベッドのことを考えただけで嬉しかった。それに、海の音を聞きながらだと、いつでも彼はぐっすり眠れるのだ。容赦ない風雨にさらされるニューヨークから、完璧に心地

よくけだるい三月のマイアミへ、いやもつと正確に言えば、マイアミから五十マイル南にある楽園キラーゴへと送り込まれてきたことも、彼の気分をよくしていた。

それに彼は、エセックス家の屋敷や地所で目にしたものが大いに気に入った。彼は常日頃から、ゼいたくなく環境で、裕福で感じのよい人々に囲まれて、探偵としての職務を遂行するのを好んでいた。だがいかんせん、厄介なのは、それは犯罪者たちの心理にも共通しているということだ。

「オマリーが言った。「あとはビールが一本あれば言うことなした」」

クレインはバルコニーの手すりに片方の肘をもたせかけて言った。「さっきの山猫みたいな目をした爺さんに電話して、持ってきてもらえよ」彼は日が落ちて濃紺ネグリーブルに変わっている海にじっと目を凝らしていた。

「そいつはいい考えだ」オマリーが答えた。

その場にひとり残ったクレインは、エセックス家の若い兄妹きょうだいに何があつたのだろうかと思いをめぐらせていた。そんな深刻なことではないはずだ。そうでなきゃ、新聞で読んでるはずだった。彼らのことは始終新聞に取り上げられていたから。兄のペンは二十五歳。スピードカーとコーラスガールと婚約不履行訴訟が趣味である（この順番に好きらしい）。妹のカメリアは二十三歳。つい最近、定期船グレース号で、神聖ローマ帝国のポール・デイ・グレガリオ伯爵と称する紳士と手に手を取っていざペルーへ駆け落ちしようとしていると無理矢理連れ戻されたばかりだった。ユニオン信託会社ユニオン・トラスト・カンパニーの事務弁護士とエセックス家の財産の管理人とエセックス家の兄妹の後見人の手によって、ことの始末がつけられたが、ついでに神聖ローマ帝国などもはやどこにも存在せず、よってデイ・グレガリオは伯爵でもなんでもないことが判明した。おまけに彼はすでに妻帯者であることまで露見した。

クレインは、オマリーがビールを二本注文するだけの思いやりを持ち合わせていることを願った。部屋に入って、二本目のビールについて確かめることにした。吸っていた煙草をひよいと投げ捨て、それが弧を描きながら落ちていくのを見守っていると、自分のいるバルコニーとは直角をなしている左翼のバルコニーに、男が佇たなずんでいるのがふと目に入った。クレインはとっさに首筋の毛が逆立つのを感じ、フランス窓から自分の部屋へ駆け込みたい衝動をこらえた。ひよつとして彫像かもしれないと思うほど、その男は微動だにしなかった。先ほど正面の窓にいた男を印象づけたのと同じ不吉な熱意を漂わせ、同じ立ち姿で、同じく帽子を目深に被っていたが、クレインには二人が同一人物とは思えなかった。こちらのほうが小柄なようだったものの、ひどく嫌な感じの男だった。

部屋の中に戻ったクレインは、額をリンネルのハンカチで拭った。「ふーっ！」そしてクローゼットのドアを開けると、中を覗き、次いでベッドの下に目を凝らした。

オマリーがバスルームのドアのところからその様子を見ていた。「何かなくなったか？」

「この部屋の中にも賊が送り込まれるかもしれないと思つてな」クレインはバルコニーにいた男の話をして、こうつけ足した。「この家にはどうもああいふ連中がうようよいるみたいだ」

「セミノール族（もともとはフロリダ州のインディアンで、現在はその州とオクラホマ州にも住んでいる）が決起したのかもしれないぞ」とオマリーが言いだした。

「馬鹿言え！」クレインがそう言おうとした矢先、ドアをノックする音がした。「たぶんビールだな」と彼はつぶやき、ドアに向かって声を張り上げた。「入りたまえ」

白いリンネルのスーツ姿の、痩せぎすの若い男が入ってきた。頬のこけた顔に、ブロンドの髪。とがった顎。とても具合がいいようには見えない。新聞で見た写真のとおりだ。

男はにっこり微笑んで言った。「ベン・エセックスです」そして注意深くドアを閉めて、差し錠をかけた。「お目にかかれて嬉しいです」

クレインはオマリーを紹介し、自分も挨拶をすると、さっそく質問を始めた。「それで、ご依頼の内容はどういうことなんでしょうか？ ブラック大佐からは仕事の話聞く時間がなかったんです」彼はグアヴァ・ゼリー色のベッドカバーの上に坐ると、彫り物がされているベッドの頭の部分に片方の腕を載せた。

エセックスは二つある安楽椅子の大きいほうに腰を掛けた。顔じゅうほとんど目かと思うような顔だった。彼はこう切り出した。「この始まりは……」そして、だしぬけにクレインのほうに向き直り、怒気を含んだ声で言った。「こんなことに怯えるなんて、自分でも馬鹿じゃないかと思えます。だってほんとに愚にもつかない話なんですから。でも、現に恐ろしいんです。あなたたちから見たらさぞおかしいでしょうけど……」

「いえ、そんなことは」とクレインは言った。「最初から話してください」

「まあ、いずれにしろ、あなたたちだったらわかるでしょう……これがまやかしかどうか」エセックスはそこで言葉を切った。彼らの耳には低い波の音が聞こえてきた。「手紙が来たんです」

「手紙？」

「これです」エセックスは椅子から体をまっすぐに起こすと、クレインの手に三枚の紙を押しつけた。「読んでください」そして、入口のドアにもたれているオマリーのほうを向いて言った。「たぶん誰かの悪戯でしょうけど」だが、そう言う彼の声にはちっとも説得力がなかった。

クレインは最初の手紙をためつすがめつしていた。白い紙を斜めに引きちぎったものに、赤いイン

クで何やら雑に書きなぐつてある。文面はこうだった。

ミスター・エセックス――

白状したまえ。さもないと……彼らが到着したらこちらの指示に従ってもらう……逃げ出そうなどとは考えないことだ。きみの動きはすべてお見通しだからな……

ザ・アイ

「おやおや」とクレインは満足げな口調で言った。彼はその手紙を裏返してベッドの上に置き、二通目を親指と人差し指でつまみ上げた。

文面はこうだった。

ミスター・エセックス――

もっと護衛を雇いたければそうするがいい……どうせ何の効果もないだろうがね……五万ドルを印のついていない紙幣で用意して……いつでも持ち出せるようにして……

ザ・アイ

この手紙もまたさっきのと同様に、もっと大きな紙を斜めに引きちぎった紙片に書かれていた。クレインは一通目の手紙を取り上げて、二通の手紙を一緒に置いた。ぴったり一致した。どちらもインクの色は赤。紙は上質の素材のようだ。クレインは、一通目、二通目と順に明かりにかざしてみたが、

論理酔いの探偵たち

笹川吉晴（文芸評論家）

ジョナサン・ラティマーのビル・クレインシリーズが日本初登場以来半世紀以上、米本国における第一作の発表からは八十年以上の時を経て、シリーズ四作目である本書『サンダルウッドは死の香り』*The Dead Don't Care*（1938）と近刊予定の第一作（が一番最後とは——）*Murder in the Madhouse*（35）をもって遂に全作が邦訳されることとなった。同シリーズというに限らずラティマー作品自体、ピーター・コフィン名義によるお屋敷ミステリのパロディ的な*The Search for My Great Uncle's Head*（37）と、密林冒険ロマンスの*Dark Memory*（40）以外全て紹介されることになる。全十作と寡作であるにせよ、まずはそれなりに恵まれた扱いであるといえるのではないだろうか（ここまでにだいぶ時間がかかったし、その間にほとんどの作品が品切・絶版になっているもの、だが）。

ラティマーは一般には、本格ミステリ的な謎解き趣向で味付けしたハードボイルドと認知されている。それが全く間違っているというわけではないのだが、そうした謂いからイメージされるものと、実際のラティマー作品の味わいとの間にはいささかギャップがあるのもまた確かなのである。

例えば本叢書、論創海外ミステリから二〇〇八年に刊行されたビル・クレインものの五作目『赤き

死の香り』*Red Gardenias* (39) の解説で、二橋暁は本格趣向の強いハードボイルドの代表例としてロス・マクドナルドを筆頭にジョン・エヴァンズ、フランク・グルーパー、タッカー・コウ、マイクル・コリンズ、デニス・ルヘイン、マイクル・コナリーを挙げているが、実のところこの中ではラティマー作品に通ずる感触を持っているのはグルーパーだけ。しかもグルーパーの自伝 *The Pubh Jungle* (67) によれば、そもそもジョニー&サムシリーズを書くにあたって五〇冊ほど読んだミステリの中から参考にしたのが『ペリー・メイスン』シリーズのプロットと、ラティマーの筆致だったというのだから、これは似ていて当然である(さらにいうなら五〇年代末から六〇年代、ラティマーはTV版『ペリー・メイスン』の脚本を書いており、なんとも縁が深い)。

では、そのラティマーの筆致とはいえば、これはもうユーモア。しかもかなりドライでブラックな。死体がゴロゴロ転がってものともせず、ギャング相手に軽口を叩きながら隙さえあれば酒をかつ喰らい、美女に色目を使いと、ロス・マクラシリアスな正調ハードボイルドとは対極にある、というか崩しに崩した、ハードボイルドはハードボイルドでも通俗的な「軽」ハードボイルドのそれなのである。そこにさらに死をおもちゃにする本格ミステリ趣向が加わるとどうなるか。実に何とも奇つ怪な作品が誕生することになる。

そもそもはハードボイルドも本格ミステリも、探偵が事件の全てを他人事として外側から眺める物語である。探偵は基本的に、関係のないことに首を突っ込んでくる無責任なお節介焼きなのだ。事件がどんなに複雑で奇妙であろうとも、どんなに陰惨な様相を呈そうとも、探偵はそこから距離を保って冷静に、愉しむことすら出来るのである。我々読者と同じように。

もっともジャンルが分化発展し、あるいは時代を追うにしたがって、ハードボイルド——探偵ディテックは主体的に事件に関わる生き方を看板として背負うことを余儀なくされ、本格ミステリの名探偵たちもまた、自分の存在自体が事件に与える影響を気にしないわけにはいかなくなる。何より陰惨な死や人生の苦みを繰り返し目にできて、なお超然とした仮面を保ち続けることに対する読み手／書き手双方からの疑問もあつたろう。例えばヴェトナムを経験した戦争映画が無邪気なヒロイズムを称揚できなくなつていったように。

今日においてはもはや、事件と距離を置いて超然としている探偵は虚構であるということに過度に自覚的であるか、さもなければ無神経であるかのどちらかだろう。作品内においてもメタ・レヴェルにおいてもおいて。

そんな時代にラティマーである。

前述の解説で三橋氏はビル・クレインシリーズに対する「スクリーンボール・コメディ」という世評を挙げている。これは『赤き死の香り』という作品自体がシリーズ最終作として大団円を志向したのか、それとも新機軸を打ち出そうとしてウケなかつたのか、いずれにせよ相棒として登場した女探偵とのコンビによるロマンチックコメディの要素が強いので非常に当を得ているのだが、ラティマー作品としては珍しくおとなしめ(?)。——「死体置ルき場」に詰めているクレインや記者たちが暇潰しに、ストレッチャー内の死体を次々に引き出しては性別・人種当ての賭け事に興じるところから始まり、美女の死体を奪い合うシリーズ三作目『モルグの女』*The Lady in the Morgue* (36) など、死体を単なる玩具や道具にする罰当たりなブラックコメディだ。海外ではラティマーをクレイグ・ライズなどと並べる向きがあるのも頷ける。

〔著者〕

ジョナサン・ラティマー

本名ジョナサン・ワイアット・ラティマー。アメリカ、シカゴ生まれ。ノックス・カレッジを卒業後、〈シカゴ・トリビューン〉紙で新聞記者として働く。1935年、私立探偵ビル・クレインが登場する Murder in the Madhouse で作家デビュー。40年頃からシナリオライターとしても活躍。ダシール・ハメット原作の映画『ガラスの鍵』や、テレビドラマ「ペリー・メイスン」、「刑事コロンボ」の脚本を担当した。またピーター・コフィン名義での作品もある。

〔訳者〕

稲見佳代子（いなみ・かよこ）

大阪外国語大学イスパニア語学科卒。東京都杉並区在住。訳書「赤き死の香り」（論創社刊）。

サンダルウッドは死の^し香^{かお}り

——論創海外ミステリ 217

2018年9月20日 初版第1刷印刷

2018年9月30日 初版第1刷発行

著者 ジョナサン・ラティマー

訳者 稲見佳代子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1751-4

落丁・乱丁本はお取り替えいたします